
聖女と白蒼の古竜

シンプル眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女と白蒼の古竜

【Nコード】

N4999Y

【作者名】

シンプル眼鏡

【あらすじ】

竜が大陸を納めていた、と伝説のあるこの大陸。エフェミアは小さな頃捨てられて以来、教会で育てられ貧乏ながらも幸せに暮らしていた。でも、16歳の誕生日を間近にした今、小さいころの記憶が夢に出てくる。「エフェミア、私の折に、必ず、迎えに行こう。」違和感を感じつつも日々を過ごしていたエフェミア。でも、16歳の誕生日。迎えに来たのは、かつて大陸を支配した、孤独な古竜だった。シリアスもほのぼのも含むけど、最後は甘々で終わる予定の一匹と一人の物語 …。

01 小さな約束と永遠の契約

…
それは、幼いころの記憶。

私は中流貴族の母が、遊びで間違っ作ってしまった子供だった。母親は誤算だから勿論愛なんてくれないし、強欲に塗れていた父親は私の存在なんて認めてくれるはずもなく。強欲で情性にもまみれ、それでも自分の手を汚す事は躊躇われるのだろうか、殺すのは忍びないと思っしたのは完全に私の事を考えた結果ではなく、ただ単に人間を殺すという罪悪感から逃げたかっただけの話だ。だから仕方なく窮屈な離れで、私は最低な親に育てられた。滅多に顔を合わせる事もなく時折目に入れても暴力をふるわれるだけ。存在を無視されることだってある。メイドたちは私の存在を煙たがり、優しさと愛のない状態で私は6歳まで育てられた。

「その歳まで育ててやったんだから、もうこの先は一人で生きていくわね？もういい加減家を出ていってくれないかしら？私も新しい男の子を生んで幸せなの。6歳なんだから、もう立派に生きてい

けるでしょう？これで野たれ死んでも貴女の責任なんだから、私達を恨まないで頂戴ね。ああ！でも、貴方を育ててかかったお金、それは返して頂戴？まあ、大体500ペガ*ってところかしら？さあ、分かった？これまで生きてくれたことを感謝して、私達に親孝行してから死んでね。さようなら。」

まともな衣類も食事も与えられず衛生状態も悪いこんな狭い部屋で、たった6年間育ててもらっただけで。でも、私は反論する気も起きず、今までの生を全部過ごしてきたこの狭い離れを、一度も振り返ることなく、出ていった。

どこに行こう。私は外になんか出た事もなく、部屋でじっとしてるばかりの6年間だったから外の世界は初めて。見るもの全てが珍しくて、呆けてしまう事なんてしょっちゅう。でも、ひとりぼっちの子供なんて厄介なものでしかなく、道行く大人は面倒くさそうな、鬱陶しそうな視線を向ける。離れで向けられていた視線とそっくりだったから、外の世界は素敵なものだと思っていた私は驚いて、それと同時に失望した。やっぱり、離れもこの広い世界も変わらない。だったら、生きている意味ってなんなのだろう。そう思った私の足は、自然と森へと向いていた。恐ろしい野の動物が出る、そして、伝説の生き物もいるかもしれないと言われている、デリウィーチエルの森へ。

02 小さな約束と永遠の契約

持たされていたものは、今着ている物と同じぼろぼろのワンピースが一着。感謝しなさい、と恩着せがましく渡された、小さな革袋に入れられた水と、布に包んである3切れの硬いパン。夕暮れになり、空が茜色に染まってきたところに適当な切り株に腰を下ろしてパンを一切れ食べて、水で流しこむ。もつと奥にいつたらながあるのだろう。別に狼や野良犬に殺されようと私は別にいい気がしていた。だから、躊躇いなく進んで行った。

暗くなり始めて、森に差し込む光も少なくなってきた。寒くなってきたな……。そんな事を想いながら歩いていたら、とても綺麗な、湖を見つけた。目を瞬かせた。こんな綺麗な物は見た事がなかった。死んでも別にいやと思っていた私は、こんな綺麗なものを見れて、初めて生きていてよかったって思えた。

近寄って湖の水を掬って一口口に含めば、何だか甘みのあるとても美味しい水だった。嬉しくて、一杯飲んだ。

でも、ふと見たら水面が揺らいでいて。どうしたのだろうと思って顔をあげたら、どんどんと小さな揺れを感じ、湖の真ん中のあたりから 其処に、伝説の生き物がいた。

白銀の毛並み。この湖よりも更に深い蒼の瞳は宝石の様で。

本も読んだことのなかった私は、それが伝説の「竜」だとは欠片も思わず、ただただこの世界には綺麗なものが沢山あるんだな、と感動していた。

見とれていたら、ふと竜の身体に鮮血が流れている事に気づく。でも、竜はそんな事気にした様子もなく堂々とした足取りで湖の中心

から此方へと向かってくる。どうしたらいいのだろうかとおどおどしていた。そんな私が視界に入っていないというように横を通り過ぎ、草のシートの上でその身を横たわらせた。

しばらく、その姿を視界に入れていた。すると、湖に入っていて気付かなかったが、竜の身体からはところどころ鮮血が流れていた。とつても痛そうだったから、もう一着持っていたワンピースを引き裂いて、縛って止血しようとした。

それまで私の事など気にもかけていなかった竜が、視線だけをこちらに寄こした。その瞳があまりにも綺麗で、私は見惚れていた。

『幼子。何故我に構う？』

頭に、直接響いてくる様なその声。吃驚して、何処からの、誰の声なのかきよろきよろしてしまった。

『…目の前に、我が居るであろう。』

呆れたような声と、じつとこちらを見て来る瞳。

それでようやく、この竜が私に話しかけているんだって分かった。

「え…、つと、痛そうだったから…。」

『から？』

「え、え、？」

『痛そうだったから、なんだというんだ。』

「だって…、痛そうだったら、助けてあげたいと、思うものじゃない、の…？」

私は、逆の立場だったら、助けてほしいと思う。それに、痛そうにしている人が居たら、和らげてあげたいと思う。私に出来る事なんて少ししかないけど、少しの救いにもならないかもしれないけど。

03 小さな約束と永遠の契約

私が置かれている状況に、そんな人いなかったから。逆に、そういう人が居たら良いなって夢を見て、自分もそういう人になれば、と思っていた。それは、可笑しなことなのだろうか？私は、今まであの狭い離れで鹿の経験しかないから、世間での”普通”が、よくわからない。だから、首を傾げた。

『……………可笑しな幼子だ。』

一つ息を吐いた竜。気分を害しただろうか？嫌われただろうか？よくわからない。でも、体を横たえたままだから、この場所を離れるほど嫌ではなかったんだろうな。もう、言葉を発する気はないのだろう、それは態度で分かったから私もいそいそと寝る準備を始めた。竜と、ちょこつとだけ離れた場所で、水とパンが入ったカバンみたいなものを枕にして寝転がれば、目を伏せた。本当はワンピースを毛布にしようと思ったけど、竜の傷の手当ての時まいちゃったからもうない。寒いけど仕方がないだろう。くちゅん、とくしゃみ。肌寒いな、なんて冬はいつでも離れでやっていた、肌を擦って少しでも摩擦熱を起こして温める。そんな事をしていても、またひとつくちゅんとかくしゃみ。そしたら、息を吐く音が聞こえた。何処か、人間的に言うのなら呆れを含む、それ。ぱちり、と目を開いて竜の方を見たのなら、私のすぐ近くまできて、私を暖めるように丸くなった。おろおろとしていたら、竜から声が掛かった。

『人間には寒かるう。私の肌に触れても温まる事はないだろうが、風ぐらひは防げよう。』

「……………」

『どうした。早く寝ないか。』

「……………」

『…何故泣く。幼子。』

「……………」
「…っだって、こんなに優しくされたこと、ないんだもん…っ。」

『……………』

「お母さんも、お父さんも、メイドさんも、私の周りの人、私の事がないものとか、イライラをぶつけるところぐらいにしか思っただいんだもん…っ。」

『……………』

「…っ、こんなふうに、優しくされたこと、氣遣ってもらった事無くして…っ、す、すっ…っく、う、うれし…っ、」

いつの間にかぼろぼろと泣いて、それでも喋っていた私の顔に、生暖かいものが触れた。それは、長い竜の舌で、少しねっとりとしたけど私はその温かさが心地よすぎて、初めての感覚で、またぼろぼろと…っ、いや、もうぼたぼたと涙が落ちる勢いで泣いた。

04 小さな約束と永遠の契約

『生涯、一人になりたくないか？』

「…ん？」

『愛されたいか。』

「…うん。」

『ならば、契約を。』

「？…契約って、なに？」

『ふむ…、簡単に言えば、約束だ。』

「なんの約束？」

『生涯、互いを一人にしない約束。共に歩むという、誓い。』

「…。」

『契りを結ぶか？』

「……………うん。」

ぺたんと、草に座っていたけど立ち上がり、3メートルぐらいの相手に向き直る。竜も身体を起こし、その瞳を正面から私に向け、見つめあう。とつても綺麗な、ガラス玉みたいな瞳が私をじつと見つめる。

『差し出すものは？』

「ん？」

『我は瞳をそなたに与える。貴様も我に一部を与えよ。』

「目をくれるの？」

『ああ。』

「でも私、目を抉るの痛そうだからいやだ…。」

『では代えの物で良い。ただ、身体の一部になるが…。』

「どんなもの？」

『瞳のほかには、指、腕、脚……………』

「む、無理、無理だよ…！」

『そうか？ああ、人間は再生しないのだったな。後は…、そうだな、効力は強すぎるが、髪。』

「髪？髪でいいの？」

『ああ。』

「こんな髪でよければ、いくらでも。」

もともと、髪を切ってくれる人もなくて伸ばしっぱなしだった髪だ。傷んでいる様子は今のところないけれど、勿体ぶるようなものでもない。それを聞いた竜は『分かった。』と言った後、その鋭い牙を携えた口を薄く開き、私に顔を近づける。食べられちゃうかも、とは思ったけれど別に怖くはなかった。逆に、こんな綺麗な瞳を見ながら死ねるなら、幸せとすら思った。

05 小さな約束と永遠の契約

私の髪を口に含み、竜は噛み切った。ちよつと頭に衝撃は走ったけれど、不思議と痛くはなかった。そして、それを食べた…、と言うか、身体に取り込んだという表現が正しいようなそれを終えた後は、竜は前足を自身の目元に持っていき、ゆっくりと目を抉りだした。びっくりしたけれど、何故か血は流れることなく、竜も痛がっていない様子もなく、私が茫然としている間、いつの間にか竜の手の前足には青色の目がころりと置いてあった。もう、それは目、と言うよりも、宝石に近かった。

『身体に取り込め。』

「え、どうやって?」

『飲み込め。』

「えっ! た、食べれるの…?」

『契約の過程だ。問題ない。』

恐る恐る、前足に乗っているその宝石のような瞳を手にした。何だ

か、ほんの少しだけ温かいそれは、紛れもなく竜の瞳だったもので、でも、何故か嫌悪感は無く、ただただ美しかった。でも、見つめていただけの私に竜は痺れを切らしたのか、いきなりその瞳を掌から奪われた。え、と思った瞬間に、もう片方の前足で器用に頬に触れられ、口を開かされた。そして、持っていた瞳を口に押し込まれた。

「むー！む、ー！んぐっ！」

『貴様に合わせていたらいつまでたっても終わらん、我慢しろ。』

耐え性がないと思う。涙目になりながら、その押し込まれたものを何とか飲み込んだ。喉につつかえることはしなかったし、変な味もしなかった。何だか、球体の水を飲んだ気分だ…。

それを見届けたのなら、竜は私から手を離し、私には理解のできない言語でなにかを呟きはじめた。少しの間続いたその言葉は、最後の方になるところどころ単語が理解できるようになって来て、どこの国の言葉なんだろう？なんて、首を傾げていた。

その呪文のような言葉が終われば、一息を吐いた。そして、竜が私を見つめる。

『…。』

「なあに？」

『効きめが遅い…。何故だ？……………ああ、そなた、歳は幾つだ？』

「6歳。」

『……………なに？』

「6歳。」

『……』

「……。」

『……、そうか。』

「うん。」

長い沈黙の後、竜がそう言った。『人間は歳をとるのが早かったな、そういえば。誤算だった。』なんて聞こえたけど、どいう意味だろうか？

『契約は、契りを結べる歳にするものだ。本来は。』

「うん？」

『だから、今すぐは無理だ。』

「うん？」

『だから……、10年後、迎えに来る。』

「……。」

『……我が迎えに行くのを、まっている。』

「……。」

『返事は？』

「……分かった。」

いい子だ、と言って笑い、竜が少しだけ目尻を柔らかくして微笑んだ気がした。そして、私の小さな口と、竜の大きな口が触れ合うだけのそれを交わした。幼い私は、どんな意味をもつかも知らなかったけど、どうしようもなく満たされた事だけは分かった。

「眠い…。」

『今日はもう眠るがいい。我も寝る。』

「うん…。」

そういつて、また先程のように竜が輪つかのような形を作って寝転がり、私はその真ん中で竜に守られる様な形で、竜に凭れるように横になった。鱗は決して温かくはなかったけど、なぜか心はほかほかとあつたかかった。

居心地の良い陽だまりに居るような感覚で、とつても気持ち良かった。幸せって、こういう事だろうなって、思った。

私は、生まれて初めて幸せの中で眠りについた

…。

01 眠る記憶はアルディティア教会にて

「……………」

『…………』

「……………」

『…………なんだ。』

「ん？」

『先程から、そなたの視線をやけに感じる。』

「う……………」

『なにか言いたい事があるのなら口にしてみる。』

「……………」

『遠慮はいらん。我々は　　なのだから。』

「……………あのね？」

『うん?』

「じゅっねん…ってどのぐらい長い?」

『…?どついう意味だ?』

「あのね、どれだけ日が昇って沈めば、迎えに来てくれるの?」

『ああ、3650日だな。約、だが。』

「……?」

『…分からぬか?』

「うん。」

『そうだな…。そなたが、今まで生きてきた6年が、今言った3650日の半分と少し、と言ったところだ。』

「……えっと、じゃあ、6年ともう半分ぐらい経たなきゃ駄目なの?」

『そつなるな。』

「え、や、やだ!そんなに待てないよ…!」

『時間を捻じ曲げる事は、我も出来ぬ。我慢しろ。』

「でも…っ。……その間、ずっとひとりぼっちなの?」

『…』

「もうやだよ…、一緒にいたいよ…。」

『…契約に違反すれば、破棄される。全てがなかった事になる。』

「…っ。」

『だが…、そうだな。』

「…?」

『確かに幼いそなたが人間にしたら長い10年という月日を一人で過ごすのは無理があるだろう。』

「う、ん?」

『仕方ない…。少し我慢しろ。』

「うえ? ……い、ひゃい。」

『額に少し爪が刺さっただけだろう。我なんて割れた事があるぐら
いだ、気にするでない。』

「う、ふえ、…分かった。」

『いい子だ。…これで道に迷わず行くことが出来るだろう。導か
れるままに進むのだ。』

「…?」

『そこで、10年の月日が流れたのなら、我はそなたを迎えに行こう。その折りに名前もつける。』

「なまえ?」

『ああ。』

「私が、あなたの名前を?」

『ああ。』

「だったらね、私、あなたの事を　　と呼びたい!」

『…なに?』

「あのね、とっても、　　だったから!だめかな?」

『…よからう、私の名は　　だ。そなたと我とだけの、永遠の』。

「えへへ。きにいった?」

『ああ。これで、我はそなたのもの。永遠の時間を共に過ごす事が出来る。』

「…?よかったー。………うにゆ、なんか、眠くなった…。」

『ああ、もう寝るか。休むまで傍にいよう。』

「ありがとう…。」

『ああ。』

「ねえ、」

『ん？なんだ？』

「あのね、
だよ。ずっと
で
ね。」

『ああ、』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4999y/>

聖女と白蒼の古竜

2011年11月26日01時46分発行